# 心的状態を表す英語の色彩語メタファー

## ―認知意味論に基づく意味拡張のプロセス―

新　妻　明　子

### 1．はじめに

本稿では、心的状態を表す英語の色彩語メタファー表現を取り上げる。英語には、“feel blue（憂鬱になる、意気消沈する）”や“see red（かっとなる）”など、心的状態を表す色彩語メタファーが存在する。日本語にも「顔を赤らめる」などの表現があるが、「恥ずかしい」という心的状態を表しているのであって、決して「かっとなる」と解釈されることはなく、言語表現の意味は英語と必ずしも一致するわけではない。これらの表現はいわゆる慣用句として使用され、その意味解釈も固定化しているが、色彩語の意味拡張によるものであると考えられる。それでは、色彩語がどのような意味拡張によって心的状態を表す解釈を獲得するようになったのであろうか。また、心的状態を色彩語メタファーによって表す動機付けは何か、英語と日本語で表現に違いが生じるのはなぜか、そのメカニズムを認知言語学におけるメタファー理論によって分析することを試みる。

### 2．心的状態を表す英語の色彩語メタファーのイメージと意味

須賀川（1999）で取り上げられている英語の色彩語メタファーの中で、心的状態を表す表現の例を挙げる。

⑴　black
　be [go] black in the face　怒る
⑵　blue
　a．blue devil（～ devils）　憂鬱、心の抑圧
　b．blue in the face　（激しい怒りで）顔が青くなる
　c．feel blue　憂鬱になる、意気消沈する
⑶　brown
　a．brown off　（米俗）誤りを犯す、（英俗）うんざりさせる、困らせる
　b．be in brown study　物思いにふける
⑷　green
　a．green-eyed　妬ましい
　b．look through green glasses　妬む
　c．green in [around] the gills　恐怖などで青ざめて
⑸　pink
　tickled pink　大喜びする
⑹　red
　a．see red　急に怒りを覚える

b．red blooded　勢力旺盛な、元気いっぱいの、男性的な

c．red face / red-faced　当惑した状態／（当惑、怒りで）赤面した

⑺　white

a．white at the lips　激怒して、怖がって

b．white-livered　臆病な

⑻　yellow

a．wear yellow stockings　妬む、嫉妬する

b．yellow-livered　臆病な

（須賀川　1999:140-149）

坂本（2007）で述べられているように、「色彩語メタファー表現が、色彩を構成する知識（特に色彩から喚起される感情の集合体）と、目標領域となる抽象的な概念を構成する要素の中から知覚された類似性に基づいて成立している」と考えると、異なる色彩から類似する感情表現が生じるのはなぜかという疑問が生じてくる。例えば、上記の例から怒りを表す表現を取り上げてみると、⑴ be [go] black in the face,（2b）blue in the face, ⑹ see red,（7a）white at the lips という 4 つの色彩を用いた表現がある。しかし、black と white は正反対のイメージを持つ色であるといえるため、どちらも怒りを表すメタファーとなりうるためには何らかの動機付けが存在するはずである。また、Wyler（1992）は、色彩語のイメージを associations（連想）と symbols（象徴）という点で捉え、次のように述べている。

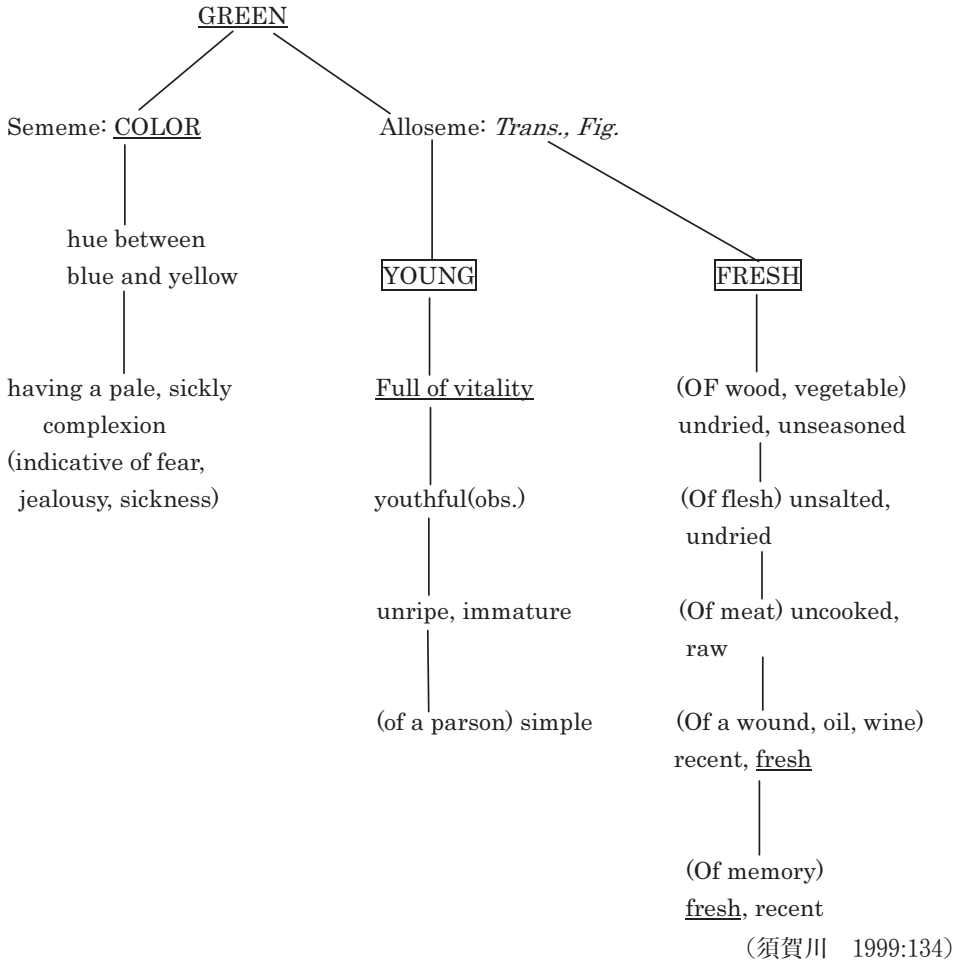
⑼　From linguistic perspective, associations evoked by a colour and symbolic values attributed to a colour are only of significance in so far as they find expression in collocations with figurative meaning in which the colour term occurs. This means that symbols based on colour as they are listed in the *Dictionary of Symbols* and Imagery do not necessarily find expression on the level of language.

（Wyler 1992:154）

ここで述べられているように、色彩のシンボルは必ずしも言語表現に見出されるとは限らないとすると、色彩を構成する知識と色彩の持つイメージ、色彩語の意味とはどのような関係があるのだろうか。⑴〜⑻の例を見ても、色彩の持つイメージと言語表現が完全に一致しているわけではないことは明らかである。さらに、その色彩を構成する知識と色彩の持つイメージ、色彩語の意味の間の関係性が、英語と日本語で言語表現に差異が生じる根拠になりうるのだろうか。

また、須賀川（1999）では、色彩のイメージと意味を、色相そのものを表す意義素（sememe）と比喩的な意味を表す異意義（alloseme）から成り立つすると分析し、色相が中心的意味を形成し、二次的意味としては比喩的意味が大部分を占めると述べている。例えば、形容詞 GREEN の意味連鎖は次の図のとおりである。

【図 1】形容詞 GREEN の意味連鎖[1]




（須賀川　1999:134）

図 1 では、形容詞 GREEN における異意義を OED の記述に基づいて YOUNG と FRESH の 2 つに分類し、その語義を下位区分としてさらに分類している。YOUNG の方は主に人に、FRESH の方は主に事物に用いられることが示されている。さらに、これをイメージと対照してみる。GREEN のイメージは次のとおりである。

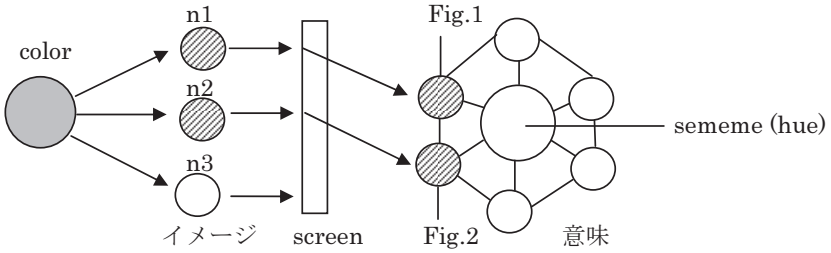
[1] 1．語義は OED の 1 ～ 10 の定義をもとに簡略化したもの。
2．下線を引いた語義は、イメージと異なるもの。

【表 1】英・日色彩のイメージ対照表[2]

| 国・文化<br>色名 | 英国 | 日本 | ローマ・<br>カトリック | 紋章学 |
|---|---|---|---|---|
| green 緑 | fresh, happy,<br>lively, gladness | 新鮮　永遠<br>平和　落ち着き | 希望　永遠<br>歓喜（教会） | love, joy,<br>abundance |

表 1 と図 1 から対応関係を観察してみると、表 1 の英国におけるイメージの fresh が図 1 の alloseme の FRESH と、イメージの lively が alloseme の YOUNG とほぼ対応していることが示されている。一方、表 1 のイメージの中で、happy, gladness といったイメージや、紋章学における joy という「喜び、楽しさ」というイメージは、比喩的意味には見られない。このことから、色彩の持つイメージと意味は完全には一致しないということがわかる。イメージと意味の連鎖について、須賀川（1999）では次のような図によって説明している。

【図 2】 イメージと意味の連鎖




（須賀川　1999:135）

図 2 によると、イメージには中心がなく、n1, n2, n3 のように数個のイメージが並んでいる。そして、このイメージは不定数であり、国・文化・個人などによって変わることがありうるとされている。一方で、意味については、中心的意味となる色相があり、その周りに比喩的意味が連鎖している。イメージの n1, n2, n3 は、スクリーンを通ってそれぞれの意味の Fig.1, Fig2 に投影されると述べられている。ここで、「スクリーン」として示されているものは何を示しているのかが問題である。言い換えれば、イメージから意味に投影される動機付けといってよいだろう。また、比喩的意味の連鎖の中心となる意味は、認知言語学的観点からみれば、プロトタイプ的な意味といえるであろう。また、（4a）green-eyed や（4c）green in [around] the gills は目の色や魚の表面の色から象徴的に表されている意味を持つといってよいと思われることから、イメージを反映している比喩的意味とは異なるといえる。

これまで述べてきたように、心的状態を表す色彩語メタファーにおけるイメージと意味連鎖の動機付け、また、イメージを反映していない比喩的意味が生じる動機付けについて、認知言語学の理論に基づいて再考する。次章では、認知言語学における比喩に関する理論を整理し、それらの理論から色彩語メタファーを分析していく。

[2]参考資料「英・日色彩のイメージ対照表」より green のみ抜粋した。

### 3．3種類の比喩

第2章で述べたように、イメージからスクリーンを通って意味に投影されるという点について、スクリーンとは何を示すかが問題点となった。このスクリーンをイメージから意味に投影する動機付けであると考えると、イメージからの意味拡張であると仮定することができる。実際に、イメージを反映した比喩的意味はカテゴリーを形成していることから、そこには何らかの動機付けがあるはずである。そこで、意味拡張の1つのプロセスとして比喩を考えてみる。ここでは、メタファー、メトニミー、シネクドキーという3種類の比喩に分けてその定義をまとめ、色彩語メタファーが生じる動機付けを見ていくことにする。

### 3．1．メタファーの定義

「君の瞳はダイヤモンドだ。」のように、類似性に基づいて意味が拡張する比喩をメタファーと呼ぶ。松本（2003）によると、メタファーは次のように定義される。

⑽　メタファー：2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。

（松本　2003:76）

ここでの「類似性に基づく」という意味は、2つの事物・概念に類似性が内在しているというよりも、人間が2つの対象の間に主体的に類似性を見出すことを表していると捉える。例えば、先に述べた「君の瞳はダイヤモンドだ。」は、「君の瞳」の〈キラキラ輝いている、高級感がある〉という特徴が「ダイヤモンド」と類似していることに基づいて成り立っている表現である。さらに、句レベルでのメタファーに基づく意味拡張の例を見てみよう。「足を洗う」という句には、〈足の汚れを水で落とす〉という字義通りの意味と、〈好ましくない仕事や行為をやめる〉という慣用句としての意味、すなわち慣用的意味がある。この2つの意味には、〈好ましくない物事を自分の身から遠ざける〉というような共通点がある。この共通点に基づいて、慣用的意味は字義通りの意味からメタファーによって成り立っていることになる。

さらに、Langacker（1987, 1999）の考察からメタファーを成り立たせる認知的基盤について見てみる。2つの事物・概念の類似性に基づくメタファーの基盤となる最も基本的な認知能力は、私たちのもつ2つの対象を「比較する」という能力である（松本　2003:78）。ここで、比較とは、2つの対象をある観点から観察・分析することによって、両者の共通点および相違点を明らかにすることである。では、2つの対象を比較して類似していると判断するプロセスにおいて、私たちは何に着目しているのだろうか。類推（類似性に基づく推論）についてのGentner（1983）やHolyoak and Thagard（1995）の研究により、類似性に大きく分けて次のようなレベルがあることが示されている。

⑾　a．対象レベル：モノの属性
　　b．関係レベル：モノとモノの間の関係　　（谷口　2006:57）

谷口（2006）ではこの2種類の類似性を例示するために、Chicken（ニワトリ）を挙げている。

次のように、Chicken は文化によって異なる比喩的用法を持つ。

⑿　chicken:
　　ａ．臆病者（英語など）
　　ｂ．プレイボーイ（イタリア語）

（12a）は、ニワトリという一種の「モノ」（個体）の属性に着目した類似性であるため、対象レベルの類似性といえる。一方、（10b）は、ニワトリが「雄鶏１羽・雌鳥複数」という割合で飼われることに由来している。つまり、個々のニワトリと比べての類似性ではなく、「雄１・雌多数」という関係性が類似しているのである。

このことを踏まえて心的状態を表す色彩語メタファーにおいて、メタファーが類似性に基づくと考えるならば、色彩語と心的状態の間には何らかの類似性があることになる。強いていえば色彩語と心的状態のどちらも「抽象的で多様な状態である」という類似性はあるといえるが、個々の具体的な表現を見てみると、それぞれの表現によって異なっている。例えば、（4c）green in [around] the gills は、呼吸が苦しくなってえらが緑色になっている魚の様子と、人間の恐怖で青ざめている様子との間に類似性を見出すことができる。一方で、色彩語の“blue”と（2c）feel blue の間には類似性を見出すことができない。Wierzbicka（1996）によると、英語の blue に相当する語が多くの言語において空という語と語源的に結びつくということや、青いものの例を挙げるように求められた人が一致して空を挙げるということに言及し、blue のプロトタイプ的意味は空という概念に基づくとしている。空の「高い」「澄んだ」「美しい」などという状態と、「憂鬱になる」という状態には直接的な類似性を見出すことはできないといえる。また、blue のイメージは、“calm, peaceful, cool, wet, faithful, constancy”（須賀川 1999:131）であるとされているが、これらのイメージと“feel blue”の間にもはっきりとした類似性を見出すことは困難であるといえる。

次にメトニミーについて見てみよう。

### ３．２．メトニミー

メトニミーとは、“She bought Shakespeare.”（彼女はシェイクスピアを買った。）のように、「シェイクスピア」という「作者」とその人の「作品」という近接関係に基づく比喩である。この場合、「シェイクスピア」という人を「買った」わけではなく、シェイクスピアの書いた「作品」を指していることがわかる。メトニミーの定義は次のとおりである。

⒀　メトニミー：２つの事物の外界における隣接性、さらに広く２つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。　（松本　2003:83）

この定義で述べられている２つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に関しては、これまでの研究によってさまざまに提示されてきている。先に述べた“She bought Shakespeare.”の例は、Lakoff and Johnson（1980）の提示するメトニミーパターンによると、次のように示すことができる。

⑭　PRODUCER FOR PRODUCT（製作者で製品を指す）
　ａ．He bought a *Ford.*
　ｂ．He's got a *Picasso in his den*.　（谷口　2003:120）

また、Langacker（1999）の考察から、メトニミーの基盤となる認知能力として、ある対象を把握したり指示する際、その対象を直接把握するのに何らかの困難をともなう場合に、別のより把握しやすいものや、あるいはすでによくわかっているものを参照点として活用し、本来把握したい対象を捉えるという参照点能力が考えられる（松本　2003:87）。前述した例に基づいて確認すると、“She bought Shakespeare.” という表現においては、“Shakespeare” という語が本来表す〈シェイクスピア〉というものを参照点として、シェイクスピアと関係性において隣接する〈作品〉を指示するということである。また、参照点は把握すべき問題の対象よりも把握しやすい、際立った存在であり、人間である私たちにとって、人間が他のものと比べて様々な意味で重要かつ際立った存在であるということが基盤になっていると指摘されている。

これらを踏まえて山梨（1988）が示すメトニミーの関係を見てみよう。

⒂　原因と結果
　ａ．赤面する（原因：恥ずかしい）
　ｂ．唇をかむ（原因：くやしい）　（谷口　2003:122）

（15a）の「赤面する」は、ただ単に顔が赤くなることを意味するのではなく、顔が赤くなるという状態を引き起こす原因である、「恥ずかしい」という感情を指示している。因果関係という時間的順序から見て、互いに接近した 2 つの出来事や状態によるものであるといえる。このパターンから分析すると、第 2 章で挙げた色彩語メタファーにおける表現において、次の表現にはメトニミーが関与していると考えられる。

⒃　ａ．be [go] black in the face（=（1））
　ｂ．blue in the face（=（2a））
　ｃ．tickled pink（=（5））
　ｄ．see red（=（6a））
　ｅ．red blooded（=（6b））
　ｆ．red face / red-faced（=（6c））
　ｇ．white at the lips（=（7a））

いずれもある感情が原因となって顔や身体部分の色が変化するという状態に至ったという解釈ができる。抽象的な心的状態よりも、目に見える顔や唇の色などを際立つものとして参照点としていると分析することができる。

### 3．3．シネクドキー

シネクドキーとは、「花見」の「花」が一般的な〈花〉を意味するのではなく、〈桜〉という特殊な意味を表すという例によって示される比喩のことである。シネクドキーの定義は次の通りである。

⑰　シネクドキー：より一般的な意味をもつ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味をもつ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩。

（松本　2003:79）

ここで、より一般的な意味とは、指示範囲が広いということであり、より特殊な意味とは、指示範囲が狭いということである。上に述べた「花」の例で確認すると、〈植物が咲かせる美しく人目を引くもの〉という類の中に〈サクラ〉という種が含まれることになり、前者の方が対象とする指示範囲が広いということになる。さらに、〈サクラ〉は〈植物が咲かせる美しく人目を引くもの〉の一種であるという包摂関係が成り立つことになる。また、山梨（1988）は、シネクドキーに、いわゆる「部分・全体」の関係[3]と「類・種」の関係があると述べている。Langacker（1987, 1988, 1999）の考察から、シネクドキーの基盤となる認知的能力としては、私たちがもっている、ある対象をさまざまな程度の詳しさや特定性で捉える能力が考えられる（松本 2003:82）。「花見」の例で具体的に見てみよう。花見の対象となるのは桜であるが、それに対して、「花」とも「サクラ」とも「ソメイヨシノ」とも呼ぶことができ、カテゴリーの範囲を示すと次のようになる。

⑱　花＞サクラ＞ソメイヨシノ

「花」と呼んだ場合には、最も上位カテゴリーとなり、対象をおおざっぱに捉えて、「花」というカテゴリーの一員と捉えたといえる。また、「サクラ」と呼んだ場合は、他の花との違いや特徴に注目して、あえて「花」の下位カテゴリーである「サクラ」というカテゴリーの一員と捉えたことになる。さらに、「ソメイヨシノ」と呼んだ場合には、対象がもつ他の種類の「サクラ」にはない特徴にまで注目し、より精密に捉えて「ソメイヨシノ」というカテゴリーに属すると捉えたといえる。このように、ある同一の対象に対する捉え方の詳しさの違いに応じて、異なる言語表現を用いて、それぞれ「花」「サクラ」「ソメイヨシノ」と表現することが可能であるということである。

では、色彩語メタファーにおいてはどのように分析することができるだろうか。松本（2003）によると、先に述べた参照点になりやすいものとして次のような例を挙げている。

⑲　（抽象的行為・状態）よりも具体的行為・状態。
　　例：頭を抱える。　（松本　2003:88）

---

[3] 参考資料「英・日色彩のイメージ対照表」（須賀川 1999:130-131）参照。
a．手を貸す。（［部分］手→［全体］人）
b．赤鉛筆　（［全体］鉛筆→［部分］鉛筆の芯）（谷口　2003:124）

この例では、「頭を抱える」という具体的行為を参照点として、「悩む」という抽象的状態を表しているといえる。このように考えると、「人間の顔の色や身体のある部分の色が何色かに見える」という具体的行為を参照点として、「どんな心的状態であるか」という抽象的状態を表しているとみなすことは可能である。しかし、色彩語メタファーに使用されている色彩語には、⒅に挙げたようなカテゴリー性はない。強いて言えば、顔などの身体の部分によってその人全体の状態を表す、という解釈ができるかもしれない。前節で述べたように、原因と結果のメトニミー関係と捉えるか、シネクドキーと捉えるかという点に関しては曖昧性が残るように思われる。いずれにしても、シネクドキーの定義によって分析できるタイプの色彩語メタファーも存在するということがいえる。

## 4．概念メタファー

第 3 章で見てきた 3 種類の比喩とは別に、Lakoff and Johonson（1980, 1999; Lakoff 1990, 1993）による概念メタファーと呼ばれる認知プロセスを提案している。メタファーを「ある概念を別の概念と関連づけることによって、一方で他方を理解する」という認知プロセスとして広く捉え直したのである。これは、私たちが抽象的•主観的な対象を理解する場合、日常的で具体的な経験に基づく概念によって理解しているというプロセスである。その結果、私たちの概念体系の中には、ある具体的な概念と別の抽象的な概念との間の対応関係が生まれ、その概念と概念の対応関係を概念メタファーと呼んだのである。また、その概念に関して、喩えるものを起点領域、喩えられるものを目的領域と名づけ、Lakoff and Johnson（1980）では概念メタファーを「目的領域 IS 起点領域」と表記する。例えば、次のような例を見てみよう。

⒇　ARGUMENT IS WAR

このメタファーは〈戦争〉という起点領域から〈議論〉という目的領域への写像であり、この概念によって次のような表現が可能となる。

㉑　a．He *attacked every weak point* in my argument.
　　b．I’ve never *won* an argument with him.
　　c．If you use that *strategy,* he’ll *wipe you out.*

（辻　2002:43）

斜線で示された語句は〈戦争〉の概念領域から選択された語句であるが、それらを用いて〈議論〉について述べていることになる。概念メタファーでは常にこのような概念領域の移行が伴っているとされるており、3．1 で見てきたような類似性は問題にならない。

また、Sweetser（1990）は、視覚表現の意味拡張について通事的に研究し、次のような概念メタファーによって成立したと述べている。

㉒　視覚表現の成立に関するメタファー
　　a．VISION IS PHYSICAL TOUCHING/MANIPULATION

（見えることは物理的な接触、操作である）
be*hold, catch* sight of, per*ceive*（ラテン語の -cipio（つかむ）より）
b．VISUAL MONITORING IS CONTROL
（視覚的観察は支配である）
*watch*（インド・ヨーロッパ祖語の **weg-*（強い、元気だ）より）
（松本　2003:93）

また視覚表現は、知識や知性、心的視覚のようなより抽象的なものを表すために用いられることもある。Sweetser はそのような拡張が（23）のような概念メタファーを介して成立したと考える。

⑵③　視覚表現の意味拡張に関わるメタファー
a．KNOWLEDGE AND INTELLECT ARE PHYSICAL SIGHT
（知識や知性は物理的視覚である）
*wise* や *wit*（インド・ヨーロッパ祖語の **weid-*（見る）より）、“I see.”
b．MENTAL VISION IS PHYSICAL VISION
（心理的視覚は物理的視覚である）
*look* down on, *look* forward to, oversee, hind*sight*
（松本　2003:94）

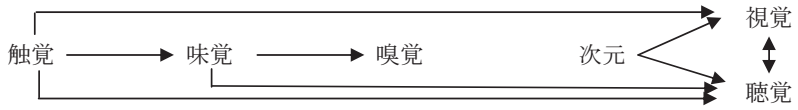
どちらの場合も具体的な外的領域から、より抽象的な内的領域へと意味が拡張している。

以上のことを踏まえると、色彩語メタファーに関して、「感情は色彩である」という概念メタファーの存在を仮定することができるのではないだろうか。しかしながら、感情と色彩の間には客観的な類似がない点で問題となる。この概念メタファーの存在に関しては、坂本（2007）でも指摘され、認知言語学的見解から、人間の経験的側面における共起関係に基づくものであると説明している。例えば、Lakoff & Johnson（1980）の説明によると、“HAPPY IS UP; SAD IS DOWN”という概念メタファーについて、感情と上下の方向性に類似点はないが、人間はうれしいと身体が上向きになり、悲しいと下向きになるという経験的基盤に基づいていると述べられている。また、Taylor（2003）は、色彩が感情に転写した共感覚メタファーの例として、“black mood”というメタファー表現を挙げている。

このような表現は、共感覚表現と呼ばれており、辻（2002）では次のように定義されている。

⑵④「共感覚（synaethesia）」とは、1つの感覚刺激（例えば音）がそれに対応する感覚（例えば聴覚）だけではなく、別の感覚（例えば色として視覚）としても同時に生ずるような現象のことを言う。この共感覚が基盤となって「黄色い声」のように1つの感覚を表す語（視覚を表す「黄色い」）を、他種の感覚（聴覚）を表すのに比喩的に転用することが行われる。

【図 3】




（辻　2002:53）

また安井（1978）は、図の右に行くほど識別可能な感覚対象の数は増えるが、それに見合う固有の感覚表現の数がないため、図の左側の低次の感覚表現から借りてこざるをえないとしている。

それでは、「気持ち」や「感情」に関してはどうだろうか。図 3 の感覚では「感情」に関しては示されていないが、実際には「ほろ苦い気分」や「甘い気持ち」のように「感情」を「味覚」によって表す表現もある。色彩語メタファーでは「感情」を色彩によって表現しているため、「視覚」によって比喩的に転用しているといえる。このような観点から考察すると、先に述べた「感情は色彩である」という概念メタファーの存在を仮定しなくても、共感覚表現のひとつとして捉えることは可能ではないだろうか。むしろ、「感情は色彩である」という概念メタファーが存在するにもかかわらず、「ほろ苦い気分」や「甘い気持ち」というような「味覚」によって表される例も考慮すると、また別の概念メタファーを用いることになりアドホックな動機付けのように思われる。

以上のことを踏まえて、次の章では、共感覚表現において新たに「感情」の位置づけを明示した上で、坂本（2007）の提案する色彩語メタファーにおける「感情は色彩である」という概念メタファーの動機付けについて再考する。

## 5．心的状態を表す色彩語メタファーと「感情」と「イメージ」を含んだ共感覚表現の再考

第 3 章と第 4 章では、それぞれのメタファーの定義とともに、第 2 章で取り上げた色彩語メタファーについて分析し、その動機付けについて検討してきた。第 2 章で問題点として取り上げた「スクリーン」に関して、その動機付けを比喩が生成されるプロセスや概念メタファーであると仮定し、第 3 章では、色彩語メタファー表現が生じる動機付けとして、いくつかの表現には、イメージから比喩が生成されるプロセスを経て投影されると分析できるものがあった。また、第 4 章では、「感情は色彩である」という概念メタファーによって、色彩と感情に直接的な類似性がなくても「色彩」という視覚的に捉えられる起点領域から、「感情」という抽象的な目的領域への意味拡張が起こっているという可能性について考察した。しかしながら、「感情」を「味覚」によって表すような表現も存在するため、「感情は色彩である」という概念メタファーを仮定することには疑問点が残る。この疑問点を解決するために、心的状態を表す色彩語メタファーは共感覚によるものであると仮定し、辻（2002）による共感覚の転用の方向性を示した図 4 の中に新たに「感情」や「イメージ」を位置づけ、イメージから比喩的意味への意味拡張における動機付けを明確にすることを試みる。

そこで、(22) と (23) の概念メタファーを考慮した上で、共感覚表現における「感情」と「イメージ」を位置づけると次のようになると提案する。

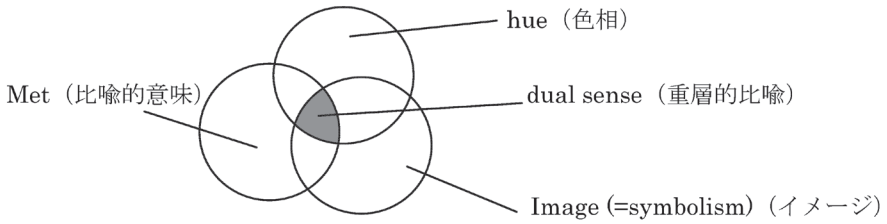
【図 4】

図 4 において、「色彩」は視覚に含まれると考えることができるため、感情を色彩語メタファーによって表す動機付けについて考えてみると、例えば「怒っている」という感情を表す場合、どのように怒っているのか表現するための感覚表現に関して、感情より低次の感覚表現である視覚から借りてくるというシステムが機能しているということがいえるのではないだろうか。そのため、「怒っている」という感情を表すのに、第 2 章で取り上げた(1) be [go] black in the face や、(6a) see red, (7a) white at the lips など、異なる色彩を用いてその感情をより詳細に表現していると考えられる。

また、「感情は色彩である」という概念メタファーを仮定する点に関しては、イメージから比喩的意味が生成されるプロセスと共感覚表現への転用とを混同しているため、色彩語メタファーがすべてそのような概念メタファーに基づいているとは言いがたいといえる。また、Lakoff & Johnson（1980）によると、“ANGER IS HEAT” という概念メタファーに示されるように、人間は怒ると熱くなるという感情的な経験と身体の温度に関する経験の間の共起関係に基づいて感情を色彩によって表す共感覚表現を説明している。図 5 における共感覚を見てみると、「怒り」という感情を「熱い」という触覚で転用して表しているというと分析することができるため、人間の経験的な概念をすべて概念メタファーとして確立していると考えることには疑問が残る。むしろ、red や blue という色彩語の意味拡張によって形成されるカテゴリーのひとつであると考えるべきであり、そうすることによって、「怒り」という感情を表す場合には色彩語メタファーのように「視覚」に転用されたり、「触覚」に転用されるという分析が可能になるのではないだろうか。

加えて、イメージと比喩的意味の関係については、両者が完全に一致しないまでも何らかの形で関わっており、意味拡張によって比喩的意味が多様になっているといえる。須賀川（1999）では、色相と比喩的意味とイメージの 3 つの関係を次のような図で表している。

【図 5】[4]




（須賀川　1999:89）

[4] 図の括弧内の語は筆者が加筆した。

例えば、YELLOW の例で見てみると、(8a) wear yellow stockings, (8b) yellow-livered に表される意味は、YELLOW のイメージである bright, happy, cheerful, sweet, energetic, rich[5] というイメージとは一致しないが、元来 YELLOW は、「胆汁の色」という連想が働き、「病気と狂気の色」、「虚偽と裏切りの色」と捉えられていたという事実がある。意味拡張と同様に、通事的観点から見てみるとイメージにも変化が見られ、どれが意味に投影されるかという点については固定的な規則性が見出せない。他の例について個々に取り上げないが、このように複数の要素が重なって色彩語メタファーという言語表現として表されているといえる。

## 6．おわりに

本稿では、心的状態を表す色彩語メタファーを取り上げ、認知言語学におけるメタファー理論に基づいて、色彩を構成する知識と色彩の持つイメージ、色彩語の意味とはどのような関係があるのか、また、心的状態を表す色彩語メタファーにおけるイメージと意味連鎖の動機付けやイメージを反映していない比喩的意味が生じる動機付けについて考察した。その中で、色彩語メタファーが「感情は色彩である」という概念メタファーに基づくものであるという分析に対する問題点を指摘し、共感覚メタファーの定式における「感情」や「イメージ」の位置づけを明示し、色彩語メタファーが色彩の持つイメージから投影される意味を表すだけでなく、感情やイメージといったより抽象的で内的な領域を、視覚によって認識できる色彩というより具体的で外的な領域によって表している可能性について考察した。

このような考察から、色彩語メタファーに関して英語と日本語で差異が生じる現象についても次のような原因が考えられる。1 つ目には、第 2 章で述べたように、色彩のイメージは国・文化・個人などによって異なり、さらに、イメージがすべて色彩の持つ比喩的意味に反映するわけではないため、それらが差異となって現れるということである。2 つ目には、英語と日本語の言語システムが異なることによると考えられる。例えば、怒りという心的状態を表現するのに、英語では多種の色彩語メタファーが例に挙げられるが、日本語は「かんかんになって怒る」などのようなオノマトペによって怒りの状態の詳細を表現していると思われる。Williams (1976) によると、前章の図 4 で提案した共感覚表現における転用の定式は、一般的傾向として英語だけでなく、印欧語や日本語においても成り立つ見通しを示唆しているが、それぞれの言語システムや表現内容において適用される範囲は異なるはずである。

さらに、今後の課題として、ここでは心的状態を表す色彩語メタファーという一つのカテゴリーとして品詞を問わずまとめて考察してきたが、辻 (2002) や坂本 (2007) の示す共感覚表現の例では「形容詞＋名詞」という構造において分析されている。そのように、日本語と英語の言語的特徴の違いや品詞による表現の分類などによって、詳細に分析する必要があるだろう。色彩語メタファーには心的状態を表す表現の他にも様々な表現があり、ほとんどが比喩的慣用表現として定着している。色彩のイメージが言語表現として選択される場合、優先的に選択される動機付けはあるのだろうか。プロトタイプ的な意味が 1 つに定められないとすると、そのような表現がどのように生じてどのように定着したのかという通時的分析も同時に行うことによって、さらに色彩語メタファーの詳細な分析が可能になると思われる。

[5] 参考資料「英・日色彩のイメージ対照表」(須賀川 1999:130-131) 参照。

また、近年では、心理実験的手法を取り入れたメタファーの分析なども行われており、より多岐にわたる具体的なメタファー表現の収集分析によって検討していく必要があるだろう。

**【参考資料】 英・日色彩のイメージ対照表**

| 国・文化<br>色名 | 英国 | 日本 | ローマ・<br>カトリック | 紋章学 |
|---|---|---|---|---|
| white 白 | bright, clean, innocent, pure, cool; sterile | 清潔　新鮮<br>無　潔白 | 淡白　純潔 | argent, purity, truth, innocence |
| black 黒 | grief, despaire, evil, sinster; elegant, strong | 高貴　悲しみ<br>眠り　邪悪 | 死の悲しみ | prudence, wisdom, constancy |
| grey 灰色 | tribulation, cool, sober, boring | 悲しみ　空虚<br>不安 | | |
| red 赤 | excitement, hot, active, rage, happy, strong | 情熱　激怒<br>愛　危険　強さ | 仁愛　献身 | magnanimity, fortitude |
| brown 茶<br>dark ～ | simplicity, modest, rich, warm, somber | 上品　冬 | | |
| orange 橙 | bright, happy, warm, hot, fun, friendly | 愛らしさ<br>暖かな日差し | | |
| yellow 黄 | bright, happy, cheerful, sweet, energetic, rich | 光輝　危険<br>八方美人 | | faith, constancy, glory, wisdom |
| green 緑 | fresh, happy, lively, gladness | 新鮮　永遠<br>平和　落ち着き | 希望　永遠<br>歓喜（教会） | love, joy, abundance |
| blue 青 | calm, peaceful, cool, wet, faithful, constancy | 無限　理念<br>冷淡　平静 | | chastity, loyalty, fidelity |
| mauve 藤 | classic, relaxing, soothing, soft | 理智的　高貴<br>気品　淋しさ | | |
| purple 紫 | justice, royalty, expensive | 高貴　優雅<br>古風　気品 | 苦悩　憂愁 | temperance |

（須賀川　1999:130-131）

**【参考文献】**


Gentner, D.（1983）“Structure-Mapping: A theoretical Framework for Analogy,” *Cognitive Science 7,* 155-170.

Holyoak, K. J. and P. Thagard.（1995）*Mental Leaps: Analogy in Creative Thought,* MIT Press.

Lakoff, G.（1990）“The invariance hypothesis: Is abstract reason based on image-schemas?” *Cognitive Linguistics* 1（1）: 39-74.

Lakoff G.（1993）“The contemporary theory of metaphor.” In *Metaphor and thought 2nd ed., ed.* Andrew Ortony, 202-251. Cambridge University Press.

Lakoff, G. and M. Johnson.（1980）*Metaphors we live by.* The University of Chicago Press.

Lakoff, G. and M. Johnson.（1999）*Philosophy in the flesh: The embodied mind and its challenges to western thought.* Basic Books.

Langacker, R. W.（1987）*Foundations of cognitive grammar, Vol. 1. Theoretical prerequisites.* Stanford University Press.

Langacker, R. W.（1988）“A view of linguistic semantics.” In *Topics in cognitive linguistics,* ed. Brygida Rudzka-Ostyn, 49-90. John Benjamins.

Langacker, R. W.（1999）*Grammar and conceptualization.* Mouton de Gruyter.

Sweetser, E.（1990）*From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure.* Cambridge University Press.

Taylor, J. R.（2003）*Lingistic Categorization 3rd edition.* Oxford University.

Wierzbicka, A.（1996）*Semantics: primes and universals with grammar and conceptualization.* Oxford University Press.

Williams, J. M.（1976）“Synaesthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Universals.” *Language* 52（2）: 461-78.

Wyler, S.（1992）*Colour and Langage: Colour Terms in English.* Gunter Narr Verlan Tübingen.

坂本　真樹（2007）『色彩語メタファーへの認知言語学的関心に基づくアプローチの検討』楠見　孝（編）「メタファー研究の最前線」307-326.　ひつじ書房

須賀川　誠三（1999）「英語色彩語の意味と比喩」 成美堂

谷口　一美（2003）『認知意味論の新展開　メタファーとメトニミー』（英語学モノグラフシリーズ 20）研究社

辻　幸夫（2002）『認知言語学キーワード事典』 研究社

松本　曜（編）（2003）『認知意味論』（シリーズ認知言語学入門第 3 巻）　大修館書店

安井　稔（1978）『言外の意味』 研究社

山梨　正明（1988）『比喩と理解』 東京大学出版会